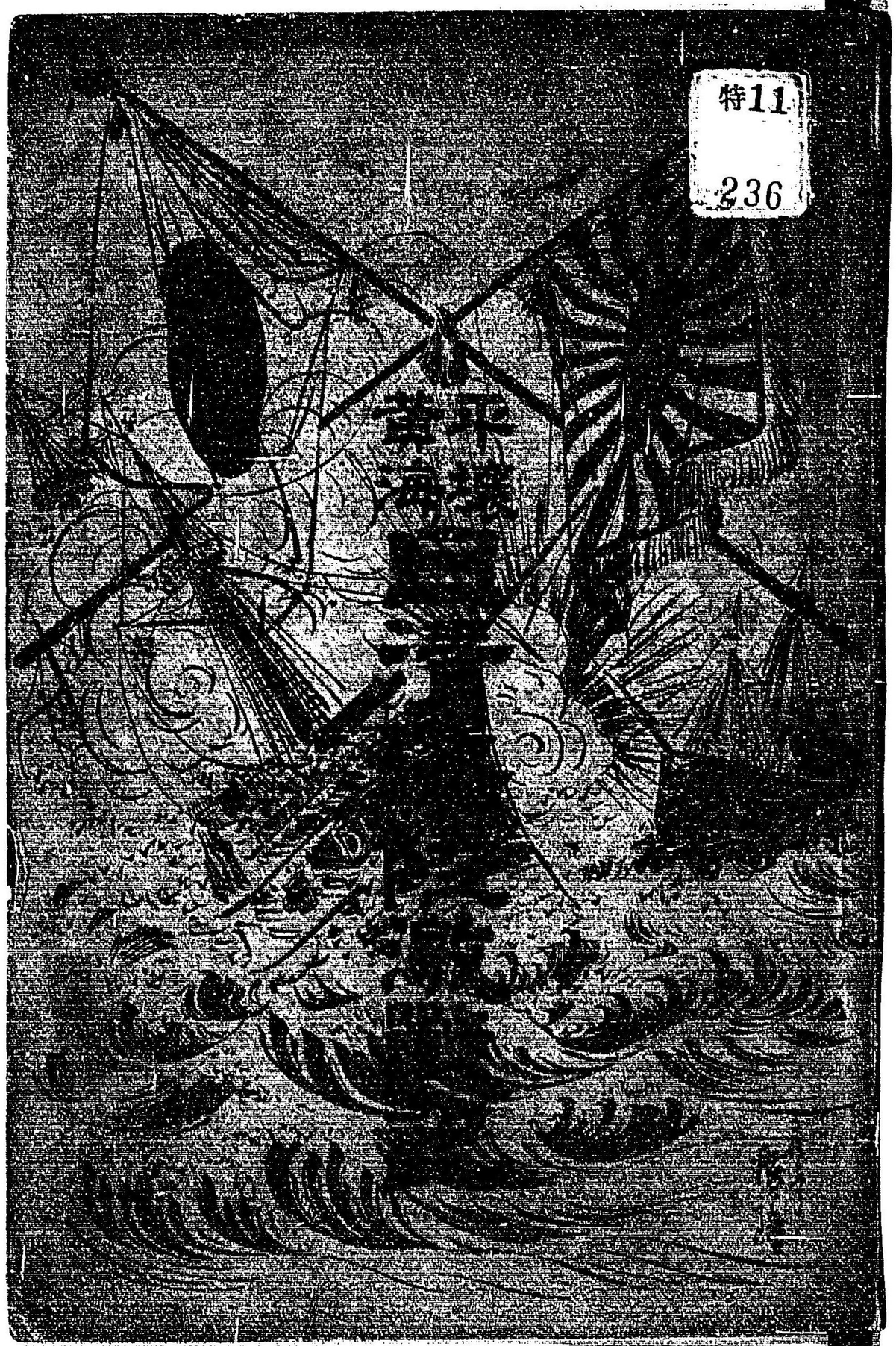


特11
236

002691-000-0

特11-236

平壤黃海日清海陸激戰記

北桃隱士／編

M27
ACB-6128

醫學源流論

平壤の烈戰は震天動地の偉觀を呈し殆んど清軍を鏖殲す大同江水爲めに碧血を漲らしたるやの感あり黃海の激戰は擊電轟雷の大觀を呈し亦殆んど清艦を絶無す海洋島邊夜る鬼哭々の聲を聞くやの感あるもの載せて此書に詳かなり其他凡ろ日清に交渉せる此間の一大事要亦載せて遺す無く漏す無く憂國慨世の諸氏急讀せざるべからず

目錄

◎大本營
◎日韓盟約
◎行幸の光景
其一　東京御發輦
其二　御道中
其三　廣島御着輦
◎征清軍觀
其一　第一軍司令官の西征
其二　平壤攻擊軍の北進一斑
其三　攻擊軍の急行
◎我軍大捷利
其一　黃州城を乘取る
其二　清軍の動止

其三　前軍衝突、平壤進軍
其四　我軍平壤を進擊す
其五　我軍平壤を拔く
◎勅語……平壤勝利御嘉納の
◎令旨……仝前
◎野津師團長の奉答
◎敗將左實貴
◎敗將衛汝貴
◎平壤大捷餘報
其一　軍司令官の電報
其二　軍司令官の再報
其三　彼我の死傷
其四　清軍の潰敗
其五　我軍の死傷

日清海陸激戰記

其六　左賓貴及び生擒

其七　大島少將其他佐尉の傷

其八　分捕詳報

◎貴州占領の後話

◎ルーター電報の我陸戰大勝記

◎平壤清軍の惨敗

◎清兵の無術

◎露國新聞の妄論

◎英國新聞の賛稱

◎陸軍大臣の訓諭

◎第一軍司令官の檄

◎榮死尉官田上覺君

◎海戰大捷利

其一　上海急電

日清海陸激戰記

其二　我艦大に敵艦を破る

其三　海戰公報……（第一）

其四　上海戰報

其五　軍令部長の報告

其六　吉野艦の戰狀

其七　大勝利の確說

其八　海戰續聞

其九　戰捷繼報

其十　海戰公報……（第二）

其十一　海軍省掲示戰報

◎勅語……（我海軍大勝御嘉納の）

◎令旨……（仝前）

◎御辭……（仝前）

◎伊東聯合艦隊司令長官の奉答

◎艦士の潔決
◎黃海戰死將校……附畧歷
其一　坂元少佐
其二　村越少軍醫
其三　高橋大尉
其四　瀨之口大尉
其五　三宅大軍醫
◎清帝の赫怒
◎西京丸の至險話
◎海戰の奏上
◎明石號の海戰報告
◎臨時議會召集

目錄終

特11
236

平壤黃海

日清海陸激戰記

北桃隱士編

◎大本營

九月八日付ヲ以テ左ノ事公ケニセラル

官報號外

來ル十三日大本營ヲ廣島ヘ進メラル

明治二十七年九月八日

海軍大臣　伯爵西鄕從道
陸軍大臣　伯爵大山巖

宮內省告示第六號ヲ以テ左ノ如ク告示セラル

來ル十三日大本營ヲ廣島ヘ進メラルヽニ付テハ、當日午前七時御出門、御發輦あらせらるべき旨仰出されたり

明治二十七年九月十二日

宮内大臣　子爵土方久元

是を承へる、今回大本營を廣島へ進めらるゝに就ては天皇陛下には大元帥の御資格を以て、行幸あらせ給へる御事なりと、嗚呼是れ千載の一遇ある哉、倩ら考ふるに、我が朝武を以て國を肇め、儼として東海の表に立つ、餘烈の被ぶる所三韓慴服の遠きに及び、來貢せざる無し、是れ畢竟代々の聖天子勇武にましまし、親しく兵を率ひて四方を經略し給へるに由らずんばあらず、中世以降唐制に倣ひ百事繁縟となり復た御親征の事あらず、維新中興、兵馬の政一切之れを大權に收めらる、乃ち今上天皇陛下、登極の初め九五の尊を以て大元帥の事を親らし給ふ、赫日天に中して億兆其の嚮ふ所を知る、今や宣戰の大詔煥發し、清國の亡狀既に天下に明らかあり、我が外征の鋒鏑、海に陸に其の兇鋒を挫折し、府

懲の加ふる所前ゑ堅陣おく、我が武の海外に宣揚せるもの亦た多しと謂ふべし、初め今回の交戰事件を生ずるや大元帥陸下先づ大本營を參謀本部内に置せらる、時に六月十四日にして、我が混成旅團の兵、始めて朝鮮京城に入れるの後三日なりき、而して日清既に開戰し、尋いで宣戰の大詔煥發以降五日、又た大本營を宮中に移させられ、躬軍國の事を親らま給ひけるを、這たび更に廣島へ進めさせられ、同地に於て尙は親しく軍國の大事を御覽ゝし給ふ御事ぞかし

陸下御仁義御勇武の程只々恐れ入り、感涙し奉るの外あらず乃ち三軍の士氣大いに振ひ、醜虜をして奔竄遁逃に是れ追まあからしめ、旭旗の向ふ所風靡せざるなけん、嗚呼是れ千載の一遇なる哉

今又大本營の義に就いて聞く所を記さん、

天皇陛下直隸の

下にありて、惟幄の軍務に參畫し、國防計畫用兵等に關する事務を掌るは、陸軍にては參謀本部あり、惟幄の機務に參して、出師作戰沿岸防禦等の計畫を掌るは、海軍にては海軍々令部あり、然に海軍は、平時と戰時と、其の動作に異る所なく、只平時に在りては、海軍大臣に移すべき傳令を、直ちに鎮守府司令長官に傳ふるの別あるのみ、陸軍に在りては、平時と戰時とは全く其の運動一變し、平時師團に屬する軍隊も自然獨立の運動を爲さゞるを得ざれば、戰時に際しては勢ひ陸海軍とも、歸一の動作を爲さしむる必要あるより、陸海軍を統轄すべき大本營を設けざるべからず、是れ之れを設置せられつゝある所以にして、今東京より廣島に進められたるもの、是れ軍隊上の便宜に依る所、我が征清軍隊尙は進んで清境に入れるの曉は、大本營遂に朝鮮へ進めらるゝやも測られ

ざるあり、若し然する時は大元帥陸下も亦た大本營と共に進ませ給ふ御事無論なるべきか、寔に恐れ入たる次第にぞあるなれ

◎日韓盟約

大本營を進められ、續いて大元帥陸下行幸仰出されたる間に於て、此の特筆すべきものこそ顯はれたれ、乃ち行幸の御次第を記述し奉るに先だち、之れを左に掲ぐるものあり、但し載せて九月十一日の官報に在るものを抄錄す

日韓兩國盟約　今般朝鮮駐劄大島全權公使と、同國外務大臣金允植との間に、記名調印せし兩國盟約は左の如し

大日本兩國盟約

大朝鮮

大日本兩國政府は朝鮮歷明治二十七年七月二十五日より於て大朝鮮歷開國五百三年六月二十三日朝鮮國政府より、清兵撤退一節を以て、朝鮮國京城駐在日

本特命全權公使に委託して、代辨せしめたる以來、兩國政府は清國に對し、既に攻守相助くるの位地を立てり、就ては其事實を明著にし、併せて兩國事を共にするの目的を達せん爲、下に記名せる兩國大臣は、各全權委任を奉じ、訂約したる條款左に開列す

第一條　此盟約は、清兵を朝鮮國の境外に撤退せしめ朝鮮國の獨立自主を鞏固にし、日清兩國の利益を增進するを以て目的とす

第二條　日本國は清國に對し、攻守の戰爭に任じ、朝鮮國は日兵の進退及び其糧食準備の爲、及ぶだけ便宜を與ふべし

第三條　此盟約は清國に對し、平和條約の成るを待ちて廢罷すべし

此れが爲、兩國全權大臣記名調印し、以て憑信を昭にす

大日本國明治二十七年八月二十六日　特命全權公使　大鳥圭介

大朝鮮國開國五百三年七月二十六日　外務大臣　金允植

此の盟約は、日韓兩國の爲め、緊急須臾くも欠くべからざる所たり、夫れ朝鮮既に清と絶ち、我が公使に托するに、清兵撤退の一節を以てす、我もと清に異心あしと雖ども、清は自主獨立國たる朝鮮を屬國視し、其の內亂鎭定に干涉して濫りに兵を派す、太だ謂れ無き所なり、我が政府早くも其の異志あるを察し、以て朝鮮政府に厲告す、此に於て日清相嫉視するの止むを得ざるに至ると雖ども、我は公明正大のみ、決して彼れ清の如き野心あることなし、只如何せん歐洲諸國の視る

所、疑心暗鬼我の公明正大を滅するの樂あり、乃ち日韓盟約は、緊急須臾くも歇くべからざる所なりとす、今や此の盟約あり、誰れか我が帝國を疑はん

◎行幸の光景

其一　東京御發輦

九月十三日、此日天氣清朗にして風徐に吹く、皇城の附近は午前五時頃より、奉送の各團体それ〳〵數流の大旗を飜して整列し、又た各官廳の奉送員、神官、僧侶及び學校職員生徒等も亦た齋しく整列したり、午前六時頃二重橋外は人の黒山を築く許り、近衛兵は二重橋外に、櫛圓形に御通路の左右に整列す、恁くて午前七時廿分頃　天皇陛下には大元帥の署服を召せられ、德大寺侍從長の御陪乘にて、錦旗を具先に數多の近衛騎兵護衛しまいらせて御發輦相成ける、允文允武な

る我が　大元帥陸下、斯く寶田の千代田の宮居を打ち立たせて、御心を安蘇の廣山へと、征清の御首途あらせ給ふ御事あり、今復た恭しく惟みるに　息長足姫天皇、舟師を提げて新羅の賊を征伐はせ給へるより以來二千有餘年、大御旗を外征の途に向けさせ給へるは、寔に未曾有の特例なり、申も畏けれ、是れ偏へに神天の御武德、溢海の御仁慈、皇祖皇宗承け繼げさせ給へる御稜威を崇しらせ、日の輝やく貳の國と云ふ韓國の人衆を、我が豐葦原の蒼生と同じく、獨立自主の民たらしめてんとの大御心となん窺ひ奉つる、之れを承はる三軍の魁豹は申すにも及ばず、四千萬の臣子誰れか感奮して監きあき王の事に是れ從はざらんや、況んや秋既に高うして馬肥ね金鳴り肉動くの時、此の御盛舉を傳へ承はる我が在韓諸將士の慷慨果して如何ぞや、扨て御發輦に相續きて

皇后陛下には、室町典侍の御陪乘にて、御發輦あそばされける、此の折しも軍樂隊君が代を奏し奉り、將校方は最敬禮を行ひ諸兵は捧銃をなしまゐらせ、無數の奉送者は一齊に天皇陛下萬歲と唱へ奉り、其聲天地に打響きて、山河も爲めに崩れん許りなり、尙ほ鹵簿到る所幾萬と云ふを知らざる奉送者、萬歲を唱へ奉らざるはなし、午前七時三十分頃新橋停車場に着御あそばされける、此の時亦た群り集まれる無數の奉送者、齊しく萬歲を唱へし聲遠きに達す、頓て御待受けの皇太子殿下、及び先着の各親王殿下、同妃殿下、各大臣の歷々方出で迎へ奉り、大元帥陛下は侍從長の御先導にて便殿にならせられ、御休息の後ち間もなく御料の濠車に召させられ、記顏麗はしく御發車あらせ給ふ、時に午前七時四十五分

其二　御道中

斯て御通輦の御道筋には、奉迎送の官民若くは邦觀の子女等まで、遠近より集まり出で、萬歲を唱へ奉らざるはなし、或は國旗の御親征を祝し奉ると記したる旗を押立て、迎へ奉るもあり、或は綠門を設け花火を打ち揚ぐるもありけり

大元帥陛下には御滿足の御色見ゐさせながら、兼て仰出されし如く名古屋に御一泊あらせられる、此の日御着輦は午後七時ありき、奉迎送の次第は大抵東京御發輦の砌りと異なるなし、翌十四日午前九時二十分名古屋御發輦あらせられ、其の御通路就中京都、大阪等を經させ給へる砌りは、儀仗兵警衛官其他諸官吏の奉迎送最大鄭重に見ゐたり、此の日午後四時三十分神戸御着輦、又た御一泊あらせられて、翌十五日午前七時四十分御發輦あらせられ、途に須磨明石なんど云ふ名

所を過ちせられければ、磯吹く風も萬歳を呼ぶかとぞ聞かけるとなん、姫路岡山尾道の諸路を經させて、官民の奉迎送等相も替らず鄭重なると、停車場毎に警衛殿堂あるとは、すべて記するまでもなく至れり盡せりと申す外なし

其三　廣島御着營

九月十五日、此日は朝來天氣清朗にして、空に一点の雲もなかりしは、陸下の御聖德を祝し奉る故かとぞ知れて有り難かりける、廣島市中は古往今來未曾有の大觀をもて、御着營を待ち奉りけるに、大元帥陸下には午後五時十五分龍顏麗はしく着御あらせらる、海軍樂隊先づ奏樂し、練兵場にては百一發の祝砲を放ち、高等官、判任官、縣、市會議員、有位者、帶勳者、赤十字社員、其の他諸有志團体等の奉迎あり、停車場より行在所までの御道筋には、隙間もなく儀仗兵警衛し、

斯くて陸下には兼て定めさせられたる第五師團司令部なる大本營へ入御あらせられしは、午後五時五十分ありしと云ふ

因に云ふ、斯の如く大本營を廣島に進められ、且つ大元帥陸下の行幸あらせられしことなれば、文武百官之れに相從ひ、取りも直さず廣島は第二の東京なり、乃ち征清の事相果つるまでは、すべての政令皆な此地に於て發せらるることと勿論なりとす

◎征清軍觀

其一　第一軍司令官の西征

山縣陸軍大將、征清第一軍司令官の大任を拜受し、大元帥陸下の御發輦に先だち、九月四日を以て帝闕を辭し西征の途に上られたることは、我が愛讀者の既に熟知せらるゝ所なるが、山縣將軍は六日を以て廣島に着き、直に本部を設

麗して出師準備に秩掌す、當時宇品港は大船を以て海を蔽ひ黑煙は天に漲ぎり、船舶の往來軍人の奔走、すさまじかんと云ふ許りなし、艤裝の船舶夜を日に繼で至り、八日に至りて出發の命は下れり、此の日正午十二時各船滿艦飾をなし、我軍の前途を祝し、呉軍港より第一呉丸を廻送し、將軍之に乘じて進行の樂を奏しつゝ、各船の周圍を回轉し、各船は敬禮の喇叭を奏し、午後三時と云ふに各船相繼いで宇品港を拔錨せり、先頭は廣島丸にて大島第六旅團長之れに乘ず、次は長門丸にて將軍及び閑院宮之れに乘らせらる、次は横濱丸にて桂第三師團長の搭する所なり、其の他順次列をなし、即ち整々として西方に向ひ航行せり、翌九日午前五時馬關海峽を通過し、六連島に至れば更に數隻の大船繫留し居りしが、將軍航行の列に加はりて共に西征す、十日午前頃海門に入る、此

の日午前四時、船隊は更に進行を始めたり、行く〳〵船隻は增加するに至り、遂に此の船隊は四列となり、各列の先導は皆な我帝國軍艦を以てす、而して船隊は列を正うし、各〳〵三百メートルを打隔て、進みけり、進むに從ひて前方及び左邊より、帝國艦隊顯はれ來て、迎送船の隊列を護衛しつゝ進行せり、大艦巨舶舳艫相銜んで、黑煙焰々天に漲る有樣實に天下の一大壯觀なり、此の航海日々天氣晴朗風濤なく、海上最も平穩にして和夜明月は中天に懸り、銀波搖々風光云ふ許りなし幾隻の艦艦は海を蔽ひ、數百の貔貅は劍を磨ぎ銃を裝す、武風凜々餘威赫々、千万の敵軍襲ふと雖ども、敢て恐るゝに足らざるの觀あり、此の航海五日にして、時恰かも九月十二日午後三時、一行の船隊は皆な仁川港に到着す、恙くて閑院宮殿下、山縣軍司令官、桂第三師團長、小川軍參謀長、大島旅

團長等の一行皆な上陸す、港内軍馬嘶き、瀛馆鳴り、各國軍艦祝砲を發する等変も〳〵起りて、勇ましなんど云ふも愚かなり、怎くて翌十三日仁川滯在、十四日早天京城に向ひて出發し、大中少將其の地將校は何れも騎馬にて漢城に入り司令郡に投ず、翌十五日漢城に滯在中、大君主殿下の勅使大將一行の來韓を慰問あり、十六日早天高陽に向ひて出發し、午後碧蹄館外の高陽監理府に投ず、十七日坡城を通過して臨津江に至る、十八日臨津江を渡りて長湍に到着あり、今は又た進みて平壤に在り

二　平壤攻撃軍の北進一班

是より先き、第五師團長野津將軍等の北進軍隊は、平壤の清軍偵探の準備を整ひ、其の先鋒第一軍は、既に八月下旬を以て朝鮮京城を發し、勇威凛々として北に向ひ、開城府を越ね

て黄海道金川郡に入り平山に屯す、是より先き清軍の馬隊は早くも大同江を渡りて其の南岸に出沒し、中和府を越ね、黄州城に入り、鳳山鎭に屯し、瑞興及び此の平山附近に徘徊し或は黄州府使を威嚇して、人夫糧食を徵發し、以て平壤に饋る等の事あり、然れども我が先鋒隊の此の地に着するに先だち、敵は退きて隻影を留めずなりぬ

因ふ云ふ、野津將軍の進發せざる以前、清軍の南下を聞きて、大島旅團長の軍隊其の幾分は、早く既に北進の途に就き、斥候偵察の我が兵、屢々清軍の幾隊と衝突し、死傷ありたる等の話は既に讀者の知る所なれば、茲に記せず

茲に一戸少佐の一隊が、早既に北進の途に就き、攻撃の準備を爲たる特報あり、八月二十九日大同江畔に臨み、專ら平壤に迫るの方法を求められしと雖ども、大同江の流れ太だ急に

して、其水且つ深く、而も又た南岸に在たりし船隻は、悉く敵軍に收められて一隻だもあるなし、此に於て三十日夜、游泳を能する者數名暗に乘じて、江流二百餘間の急湍を横ぎり漸く北岸に達するを得たりと雖も、繫げる所の船隻には敵兵ありて、忽ち我が兵に向ひて發銃しかけたれば、遺憾ながら之を奪ふことを得ざりしと云ふ、後ち此の一隊は再び廻進して開城府に達し、此の地にて第五師團本軍の到るを待ちつゝありき

因に云ふ、八月下旬以前の我が北進軍に就て、記すべきもの無きにあらざれども、今之れを略す

第一軍大島旅團長平山に屯する後ち、立見旅團長の軍二十九日開城に着し、續きて其の朔寧枝隊は、江原道に近き一路を進み來り、而して倘ほ谷山逕安地方に進む、此の時元山より

上陸したる第三師團の一軍、大迫旅團長の分隊佐藤大佐の卽ち元山枝隊は、直ちに平壤に向ひ〻進みたり、大島旅團長平山に留まること三日にして、惠秀に瑞興にと進みたり、恁て我が軍の大体方略は、元山より成川方面に、第三師團の大迫混成旅團長、開城より中和方面に大島旅團を差向け、其中間に當る朔寧より三登の方面には、歩兵二大隊及び砲兵若干に、立見旅團長を假に其の枝隊長として差向け、第五師團本部の護衛には、此の時未だ開城に在たる立見旅團を充ると聞ねたりき

すべて北進軍通過の地勢は、韓圖を開きて之れを見るに若かざれども、今爰に惠秀以北の地勢を聊か記さん、惠秀の清流は南流して禮成江に入る、惠秀以北三十韓里までの土地は皆其の上流なり、巖回り溪轉じて漸く車岑に至る、車岑の峻坂

は高さ一町許り、路其嶺に出れば地勢一變して溪溝皆な西北に向ふ、蓋し車岑一帶の連山は、中央山脈より分れたる一枝脈に屬し、恐秀平山地方と、瑞興鳳山地方とを分劃するもの、あり、車岑以南二十韓里は、或は河流に沿、或は橋梁を渡て平地を過ぎ、行行て瑞興の南口に到れば地勢廣濶遠く山峰を望み、風景絶佳我行軍を慰めたるもの、如し、扨又大島旅團長は九月五日を以て瑞興を發し、劔山、鳳山、黄州へと進む

其三　攻擊軍の急行

我が征清軍隊は、右の如くにして漸次歩を進つゝあり、而して野津將軍の本隊も既に鳳山に若す、此の日司令部に於て、野津將軍、上田參謀長、福島中佐、上原少佐其他各將校等密議ありて、行進を急にする事となれ、是までは左まで急にもあらざるが如く見たれど、此に至りて急行を決するに至りしは、清軍前途に出沒して、擧動あるに依り、斯くては我が軍の進行に、拙なからざる不利不便を感ずべしとの故なりき、北進の次第は概ね右の如くにして、平壤攻擊軍は四分、即ち四方より平壤を取圍み、以て清軍を殲殺する戰策と知らるべし

◎我軍大捷利

其一　黄州城を乘取る

九月十二日午前十一時四十五分發釜山より電報あり曰く

本月六日我が北進軍隊は、黄州附近に於て清國騎兵を擊破し、進みて黄州城に在る敵兵を襲擊し、遂に黄州城を乘取りたりとの確報京城に達したり

黄州城に敵兵五六百ありと聞きしが、我が先鋒隊と衝突して事茲に至りしあり、乃ち之れを我が第一戰勝とす

其二　清軍の動止

爰に清軍の近狀を語る者あり、其の言に據れば左の如し、

平壤の清軍は、米麥の外に食物おし、平壤近傍のものを食荒して、遂に數里の外に出で、不熟の粟を刈取りて食用に供し居れり、清兵は此程まで陽德附近を出入し居り、時としては德原に來ることもありしが、我が軍陽德に到着せし以來は、成川以東復た清兵を見ざるに至れり、而して陽德の府使以下朝鮮官吏は、我が軍の此の地に着するや否や、疾れも逃去りて一人も居らざりしあり

此の地に達したる我が軍は、元山より進みたる佐藤大佐の所屬る元山枝隊あり

其三　前軍衝突、平壤進軍

十三日午後六時發釜山よりの電報あり曰く

我が軍の先鋒は、中和、三登、成川の各地に進達して、已に敵の先陣と衝突せり

我が軍の一隊は、去る十一日より鐵島の上流に於て大同江を渡り、河岸に沿うて平壤を指し進軍す

其四　我軍平壤を攻擊す

十五日午前五時發釜山よりの電報あり曰く

清兵の一隊、平壤より元山に通ずる成川附近に出現し、こに我が兵と衝突起れり、平壤は正面と側面とより、我が軍攻擊を始めたるよし、即ち戰は二ケ所より開かれたるものゝ如し

平壤攻擊に、四方よりするものあれども、其の先着の軍隊より攻擊を始めたるに依り、先づ二方より攻めたるものと見ゆ

此の時また別報あり、即ち左の如し

十一日彼が右翼軍卽ち元山より進みたる軍隊は、成川及び三登より進擊を始め、中軍卽ち京城より進みたる軍隊は、中和より進擊を始め、左翼軍卽ち京城より進みたる別軍は大同江中の鐵島附近の上流を渡り、進擊を始めたり

此の報に據れば、三方より平壤を攻擊したるもの、如くなれども、後報に接したるに至りて、四方より攻擊したること明らかなり

其五　我軍平壤を拔く

續々電報を手にして、平壤攻擊の快聞は耳にすると雖ども、其の勝敗を聽かざるまでは手に汗を握り、西天を望みて我が軍勝利か將た如何と、案ては必勝を期し居たるもの、今に至りて疑心は生せず然るに果して我が軍は勝ち、平壤を拔くの快電に接せり

第一報（十六日午前八時中和發）

昨日來師團は平壤を圍み、激戰の後ち大勝利、今朝未明全く平壤を略取す、敵の死傷極めて多し、我が軍將校以下死傷大約三百人、委細跡より

十六日午前八時

野津師團四長

此の役の我が死傷こゝに三百人とあるも、後報に依れば尙ほ其の數を增すあり、後に之れを詳記す

第二報（十六日午後一時五十分中和發）

師團は糧食の大困難に拘らず、各道より平壤に向け前進し昨日を以て齊しく城の四面を圍み、激烈なる戰鬪をなし、大勝利を得、今朝未明を以て全く之を略取し、敵の大將左寶貴以下死傷、生擒、兵器、米穀の我手に落ちしもの極めて多數、敵の兵力は二萬と稱せしが、昨日來一二群を作し

て、我哨兵線を逃れ去りしのみにして、他い約ね死傷捕虜となれり、我軍死傷將校以下三百人、大勝利敵の大將左寶貴は、奉天府及び牛莊附近に屯在せし保字軍の統領あり

第三報（十六日午前九時發）

昨日平壤攻擊の際、來院せる負傷者、將校十一人、下士以下二百六十人、卽死未詳、入院後死亡二人

派遣洞に於て　柴田第一野戰病院長

在廣島　石黑野戰衛生長官

此の如く我が軍大勝利の電報、國の內外に達したれば、第一我が在韓居留人民は、狂奔して相慶ま、釜山泡碇泊の諸船の如きは滿艦飾して祝忌を表し、恰かも正月の如き狀あり、其他京城、元山、仁川等にても亦た同じく然り、更に內地に至り

十六日なり、是は進み彼ゝを取る、乃ち勅語に本營を進むるの初に當りと宣はせて、深く御滿足の御意を含ませ給ふ、げに何等の吉報か之れに過るものあらん、我軍前途の大勝利も亦た思ひ知らるゝか如し、有栖川參謀總長の宮は直ちに電信をもて、之れを在韓第一軍司令官、聯合艦隊司令長官、第五師團長等へ傳宣せらる

◎令旨……仝前

皇后陛下へ奏聞したりければ、有難き平壤略取の事亦た令旨を賜はりたりとて、參謀總長の宮にはまた、在韓第一軍司令官、及び第五師團長へ左の電報を遣はさる

平壤の大勝利を直ちに皇后陛下へ言上せし處、頗ぶる御滿悅我軍將校の忠勇なるを、深く御感賞の旨御沙汰あらせられたり、此旨傳達す

ては、各地齊しく大祝意を表し、或は廣島なる大本營に向ふて、懇到なる慶祝の意を致すもあり、後に承はれば大元帥陛下には、一々祝電者の姓名等を聽せられ給へりと云ふ、恐多くも亦た有り難き事になん

◎勅語……平壤勝利御嘉納の

我が軍大勝利の電報、早く既に大本營に達し又た聖聽に達す、十七日大本營に於て御前會議を開かせられし砌り、忝くも左の勅語を賜へりと親ふ

朕本營を進むるの初に當り、我軍大に平壤を捷つの報に接し、深く將校下士卒の勤勞を察し、速に特異の功績を奏せしを嘉す

大本營を進められたるは十五日にして、平壤を略取したるは

◎野津師團長の奉答

總長の宮より傳達せられたる勅語及び令旨は、已にして野津師團長の拜受する所となり、十九日午後六時四十五分平壤より大本營へ、左の電報を致して以て奉答せらる

臣道貫、常に其任に堪へざるを恐る、幸に平壤を拔きたるは、全く陛下御威德の致す所なり、今や優渥の勅語を忝うす、將校下士卒皆感泣して、益奮進一死以て聖恩に報い奉らんことを誓へり、謹みて奏す

◎敗將左寶貴

平壤敗軍の將左寶貴は、身に重傷を負ひ我が軍に生擒せられしなり、彼れは現官鎭守廣東高、廉、欽、雜四州等處地方水師總兵官加三級」にして、恰かも我が少將に相當す、山東省の產にして軍功を以て累進せり、今回攣ばれて奉天府及び牛莊

屯在の保字軍に統領として、平壤に出陣し、我が軍の爲めに大敗を取りしかり、又た彼れは有て宋慶等と共に營口に在り遂河の南岸なる砲臺附近に土營二ケ所を建設し駐屯せし事ありと云ふ

◎敗將衛汝貴

同じく平壤に敗れたる統領衛汝貴は、現官「欽命提督軍門、賞戴花翎、甘肅寧夏鎮挂印總兵官、珊松領巴圖魯、一等軍功加三級」の銜を帶び字を達三と曰ひ、安徽省合肥縣の產なり身を行伍に起し、功を以て累進したるなり

◎平壤大捷餘報

平壤大捷の電報既に獲たるもの、嘱せて前に在り、其後又た續々同電報に接す、之れを前報と相見るに、似て而して異なる所あり、乃ち蒐集して以て茲に掲ぐ

其一　軍司令官の電報

此の電報は、十七日午前三時四十五分高陽發に係る、曰く

佐藤大佐の元山枝隊は成川より、立見少將の朔寧枝隊は麥田店より、大島少將の混成旅團は義州街道より、野津中將の本隊は大同江を渡り右岸に沿ひ、共に平壤に向ひ、十五日四面より同府を包圍攻擊す

大島少將の報に據れば、敵の大部分は平壤内を其左右にのみ幕營し、其小部分は左岸船橋里に在り、大同江には架橋をおしたり、攻擊の結果に據れば、敵の砲は二十門以内に過ぎず、又土人の言に據れば、敵の兵數は約ね四万餘人あると

本隊は川を渡る爲め少しく後れ、十五日の攻擊に於て敵の馬兵百餘人を斃したり、然れども此日の攻擊の結果は十分

もらす

因て十六日拂曉より再び攻撃を始めしが、大島少將の旅團は、將校卽死六人、負傷十二三人、下士以下死傷三百以上に及びたると、彈藥の缺乏とに因り己を得ず攻撃を中止せしも、各方面の鬼闘漸次有利の景況を呈し、朝八時頃遂に全く平壤を略取し、敵の大將左實貴以下死傷生擒、兵器、糧食我手に落るもの極めて多數

大島混成旅團は義州街道よりすとわり、接するに義州街道は清軍來往の本道にして、此の方面に進みて而して平壤を攻撃す、蓋し是れ最も困難の地位に立てるものあり、既に戰ふに及んで將校下士卒の死傷多きに至り、且つ彈藥の缺乏を告ぐるに至り、攻撃を中止するとあるからは、果して困難の狀察するの餘りあり、又た聞く所に據れば、我が此進軍が行進の

際道途の險難に遇へるは勿論、糧食其他運搬の自由あらざるを告げたる事情もありとか云へり、是に由て之れを觀るに、彈藥缺乏は其の運搬の至らざる爲めにもあるか、未だ詳報に接せざれば、之れを明らにするを得ずと雖ども、此の役の大苦戰それ此の軍隊に在るか

其二　軍司令官の再報

此の電報も亦た前と同時に達したるあり、曰く

第五師團長は、敗兵追擊の爲め十七日一枝隊を前進せしめぬ、又捕虜の數已に六百に達したり

佐藤枝隊に將校の卽死三、負傷四、下士以下死傷百四十、其他未だ報告あらず

分捕中、金銀塊を充てたる目方三十五貫目餘なる函四十箇、韓錢六萬七千貫あり。

此報の死傷數は、前報死傷三百の外あり

此に至りて平壤攻擊の際、我が死傷三百以上なるを知る

其三　彼我の死傷

十八日在平壤なる野津第五師團長より、廣島留守第五師團長の許に達したる電報あり、主として彼我の死傷を記す、曰く

平壤の攻擊に於て、我死者士官八人、下士卒百五十四人、傷者將校三十六人、下士卒三百七十八人、雜卒三人、生死未詳下士卒四十人、敵の死傷おほむね二千餘人、傷者は判然し難しと雖も、少なくも死者の倍はあるべし、又捕虜清人五百十三人、韓人百四十九人、其他の傷者清人八十二人、韓人二人、馬匹の斃死無數

此の報に依て見るに、敵軍の死傷甚だ尠きを疑はざるべか

らず、然れども平壤略取後日尚浅し、未だ十分なる調査を遂ぐる能はざるべし、蓋し是れ大數と見るべし

其四　清軍の潰散

十九日午後六時三十分發、山縣軍司令官より大本營に達したる電報あり、主として清軍潰散の事を記す、曰く

十五日午前十時前後、敵の騎兵凡三營(一營約ね二百五十人)我本隊の展開せる江西及び瓶山街道間に突進し來りしが(我本隊平壤に向ひて展開せる最前、兩道間の地より敵騎突進せしものか)其過半數は我射擊に殪れ、其擊ち漏らされの者どもは、五人十人群を成し、江西、瓶山方向に散亂せり

又十時ごろ、敵の歩兵凡二百人許りは密かに沼の中を潛り寶山を經て江西に走り、或は中和、寶州(此地に逃げしは多分本隊より川に歴せられて逃げしものか)に逃げたり、其夜

宜州津近傍にて夥しく火の揚るを見しが、夜九時頃より敵の歩兵陸續哨兵線に向ひ突進し、多くは繫退せられ、其一小部分のみ山間を越ね逃れたり

元山枝隊の方面に於ても同樣の事なりき、此諸隊（重に元山枝隊を指す）と我本隊の左側衛との間に、獨立騎兵を置き聯絡を取りしが、敵の敗兵の多くは此方面より逃れ去れり、されども別に隊伍を成すにあらず、其武器を携帶し衣服を着けし者太だ稀なり

第五師團長は兼て元山枝隊に命じ、順安に一部隊を留め置きしが、右敗兵ハ再び之に衝突し、夥しく刺殺せらるつまり敵の退却方向は義州なること判然せしゆゑ、昨日報せし通り一枝隊を派し追擊せしめたり

其五　我軍の死傷

此の役我が將校死傷の姓名を獲たれば、今之を左に記す

左は第五師團の分

戰死

歩兵第十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（岡山縣士族）　田上　愚

歩兵第十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（鹿兒島縣士族）　町田實義

歩兵第二十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（鳥取縣士族）　林　久實

野戰砲兵第五聯隊中隊長
陸軍砲兵大尉　（岡山縣士族）　山本忠知

歩兵第十一聯隊
陸軍歩兵中尉　（鹿兒島縣士族）　今井　建

歩兵第十一聯隊
陸軍歩兵中尉　（石川縣士族）細井有順
負傷
野戰砲兵第五聯隊第三大隊長
陸軍砲兵少佐　（熊本縣士族）永田龍
歩兵第二十一聯隊副官
陸軍歩兵大尉　（山口縣士族）小倉信恭
歩兵第十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（石川縣士族）桑木崇臺
歩兵第二十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（愛姫縣士族）服部尚
歩兵第二十一聯隊中隊長
陸軍歩兵大尉　（廣島縣士族）若月曾一郎

歩兵第十二聯隊
陸軍歩兵中尉　（岐阜縣士族）井野口春清
歩兵第十一聯隊大隊副官
陸軍歩兵中尉　（廣島縣士族）林景弘
歩兵第二十一聯隊
陸軍歩兵中尉　（新潟縣平民）本間德次郎
歩兵第二十一聯隊
陸軍歩兵中尉　（山口縣士族）三井每雄
歩兵第十一聯隊
陸軍歩兵少尉　（愛媛縣平民）乃萬文太郎
歩兵第二十一聯隊
陸軍歩兵少尉　（山口縣士族）國弘榮一
歩兵第十一聯隊

陸軍歩兵少尉　（山口縣士族）　菅野尙一

左は第三師團の分（何れも第十八聯隊）

戰死

中隊長大尉　（新潟縣士族）　金藤之明

大隊副官中尉　（山口縣士族）　神田音熊

負傷

中隊長大尉　（山口縣士族）　品川梅藏

中隊長大尉　（岡山縣士族）　吉田充親

聯隊附中尉　（福岡縣士族）　岡島尙志

仝　中尉　（岡山縣平民）　三宅義任

仝　中尉　（三重縣平民）　濱田義夫

更に下士卒の死傷に至りては、未だ詳かに其の姓名を知るに至らず、況んや生死未詳其の行方知れざるものあるをや、

其六　左寶貴及び生擒

十九日午前十一時平壤發の電報廣島大本營に達し、二十三日午後一時三十五分廣島發上田參謀長より、兒玉陸軍次官宛にて、左の電報あり

左寶貴死す

生擒五百五十五人、內大隊長以下士官七人、負傷者百十六人、生擒の朝鮮人十五人、內負傷者四人なり、此外五十六人生擒後、手向ひしたるゆゑ斬殺せり

其七　大島少將其他佐尉官の微傷

二十四日午後五時五分東京發至急電報あり、曰く

平壤の役、微傷を負ひたるは、陸軍少將大島義昌、歩兵中佐西山助義、歩兵少佐森鼎忠、歩兵中尉松浦直一、歩兵少尉石藤市勝、歩兵少尉桂武市の諸氏なり

此の負傷は前報に漏れたるものにして、殊に大島少將西山中佐の負傷の如きは、今に於て始めて聞く所なり、前にも大島少將の苦戰甚だしかるべきことを述べ置きたりしが果して微傷を負はるゝに至れり、以て當時の一大難戰たるを想ふべし

又た少將の負傷に就て、醫官入院を勸めたるに、それには及ばずと辭されたる由なれとも、醫官の強ちなる勸めに遵ひて少將遂に野戰病院に入られたりと云ふ

又た右の負傷將校の官位、屬籍、年齢は左の如し

歩兵第九旅團長陸軍少將從四位勳三等　山口縣士族　大島義昌　四十餘年　三ヶ月

歩兵第十一聯隊長陸軍歩兵中佐正六位勳三等　熊本縣士族　森鹿敬　四十六年　三ヶ月

歩兵第十一聯隊附陸軍歩兵中尉從七位勳六等　山口縣士族　松浦直一　三十八年　一ヶ月

歩兵第廿一聯隊附陸軍歩兵少尉正八位　廣島縣士族　石藤市勝　二十四年　八ヶ月

歩兵第十一聯隊附陸軍歩兵少尉正八位　廣島縣平民　桂武市　二十六年　六ヶ月

今又た此の役我が死傷數の統轄を分けたるものを獲たり、即ち左の如し

本道より進みし大島少將の混成旅團

將校即死　六人〇同負傷　十八人〇下士卒即死　百十人

〇同負傷　二百五十七人〇不明　十三人

北廓に向ひ朔寧より進みし立見少將の技隊

將校負傷　三人〇下士卒即死　九人〇同負傷　四十五人

〇不明　一人

元山より進みし佐藤大佐の指揮隊

將校卽死　二人〇同負傷　五人〇下士卒卽死　三十一人

〇同負傷　八十七人〇不明　十九人

西面に向ひし野津中將の本隊

將校負傷　一人〇見習士官負傷　一人〇下士卒卽死　四人〇同負傷　二十一人

其八　分捕詳報

平壤に於て數多の分捕ありし由は、前電に掲ぐる所なるが、彼の金銀塊と云へるは延金三十貫目入十五函、馬蹄銀十五函にして、韓錢二十五万貫なりと云ふ

又た分捕の大砲は、すべて四十門にして、平壤の分三十六門内クルップ野砲四門、山砲二十六門、カットリング砲六門あり、外に敵の安州に遺し置けるもの野砲四門なりと云ふ

◎黃州占領の後話

陸戰の急電は大抵右にて盡したり、是より其の詳報の至るを待つあるのみ、會ま黃州占領の戰狀を聞くを獲たり、曰く本月六日我が北進軍の平壤方面に向へる途次、先づ黃州を占領せしは陸戰大捷の第一戰となすべし、さても同日午前八時我が先鋒一戸は、先づ黃州の南邊に於て、清兵奉軍營の斥候二十騎に衝突せり、乃ち我が軍これに應戰して其一騎を斃せしに、餘兵は爲めに戰機を亂し、黃州城内に逃込みたり、此に於て我が兵追躡して城内に入らんとせしよ城壁銃眼より清軍の步兵頻りに發砲したれども、我が兵の銃鋒に當り得ず、遂に其騎兵と共に城外に逃れ去れり、其の數未だ詳かならざれども、一說に據れば確かに六百を越ねたりと云へり、是より先き清兵七十餘、鳳山郡に進み來るものありしも、去る四日

我が先鋒の進行に辟易して、洞仙岑を越ね黃州を退守せり、我が先鋒西島中佐は翌五日鳳山に出で、其の夜第一大隊一戸少佐は舍人關に宿し、西島中佐は第二、三兩大隊を率ゐ鳳山に營舍し、一戸少佐の黃州南邊に達したる時には、既に舍人關に進みたり、而して一戸少佐既に黃州に入るや、西島中佐亦た之れに從ひたりと云ふ、敵兵只一騎を失ひて狼狽逃走す其の軟弱想ふべし

◎ルーター電報の我陸軍勝記

九月十八日倫敦發のルーター電報を北清日報に載せて曰く、去る十五日平壤に於て大戰あり、同地を守れる二万の清兵のうち、一万六千擊たれ或は傷、けられ又は囚虜となれり、而して平壤は日本兵に占領せられたりとなり、但し日本兵の死傷は至つて僅少なる趣あり、又た一報にハ二万の清兵悉く降伏したりと云ふ、其の所載の少しく事實に違へる所あるも、我が勝利を傳ふるに至りては誤りあしと云ふべし

◎平壤清軍の惣數

ルーター電報にも二万とあるが、其後ち野津將軍より大本營へ通報ありたるに據れば、盛字軍八千、奉軍三千五百、奉天練軍盛字營一千五百、毅字軍二千、牙山の敗兵一千餘なりしと云ふ

◎清兵の無術

清兵怯惰にして兵事に暗き、我が軍の疾くに認知する所なるが、平壤の戰爭に、其の用兵の無謀なる實に驚くに堪へたりと云ふ、普通兵法の上より考ふれば、平壤の市街附近は陣營を搆へ、大兵を駐ひべきにあらず、いざ開戰と云ふ曉には、此所を去りて後方要害の地に據らざるべからざるに、大同江

の防備さへ爲さずして漫然控へたるは無術と云べし、清兵若し平壤の本陣を撤し、後方の要害に據りて死守したらんには、我は縱しそれを拔くに至るも、必らず多少の損害と困難とはありしならんを、清兵の思ひ茲に至らざりしは、殊に我が軍の幸と云ふべしと、其將校の物語る所なりとぞ

◎露國新聞の妄論

ルーター電記に據れば、露國新聞は論じて曰く、日本の勝利は、露西亞が日本の朝鮮幷呑を滿さずとの決心を飜がへすに足らず、而して今や歐羅巴が仲裁すべき時機到來せりと、蓋し平壤の戰捷に對して之を云ふならん、彼れは未だ日韓盟約を熟讀せざるべし

◎英國新聞の賛稱

又ルーター電記に據れば、英國諸新聞紙は平壤に於ける日は

本の勝利は、重大なる價値を置き、此の一勝は日本國を東洋の一大强國となすものなりと貴揚したるが如し、然れども英國の賞揚賛稱は、自ら爲めにする所あるが如くに思はる、而して倫敦タイムスの言あり、果して之を證するに足る、其の言に曰く、日本に對する英國の政略は、全く友愛の主義を取る而して英國と日本とは、現に一も反對の利害を有せざるなり と、且つタイムス日本に警告して曰く、露國が太平洋に於て一港を得んと冀望するは、是れ日本及び英國の共に戒心すべき所なり、又た露國は外國干渉事件に於て、日英兩國が相提携して立たんことを待ち設くるものありと

◎陸軍大臣の訓諭

平壤の戰勝に依て、殆んど六百の清兵を生擒たり、清兵固と暴横無情、我が兵乃ち之を含べし、中和に於ける斥候の衝突

に、彼れハ我に對して殘虐を極めたり、今生擒するもの此の如し、我が兵憤怒遣る方なく、暴に報いるに暴を以てせんか然ありては文明的軍人の不面目なりと云はざるを得ず、大山陸軍大臣其の管下各團隊に、左の訓諭を發せられたり、乃ち思ひ合すこと此の如し

戰は國と國との戰にして、一個人互の恨あるにあらねば、たとひ敵なればとて、傷を受けるか病にかゝりたる者をいたはり救ふは人の常なり、故に文明の國々にては、戰時敵味方の別ちなく、負傷者病者を救あふことを平時に於て約束す、所謂セネーブ條約(一に赤十字條約とも云ふ)是なり、我國にては明治十九年六月此條約に加盟せられ、我軍人は此約束によりて、敵の負傷者病者に對して、愛敬を加ふべき義務あることは、常に教へを受けしことあれば、これを

心とするハ勿論なれども、清國の如き文明の化いまだ洽からさる國の兵は、此等のことを知らざる故に、我負傷者病者に對して、暴戾の所行あらんも測りがたければ、此方にては充分の用心かかるべからす、又敵はいかに殘暴にして悪ひべき所行あるにもせよ、此方にては文明の公法により傷痍者をは救護し、降者俘虜をば愛撫し、仁愛の心を以て之に對すべし、啻に負傷者のみならず、我に敵せざるもの は、皆な之に對するに仁愛の心を以てせざるべからす、又敵の屍に對しても此心を以てすべし、故に文明國の戰に敵將の屍に對しても、其官相當の禮を以て、之を禮に引渡せし美談あり、抑も我軍人は天皇陛下の御仁惠を心として、勇剛にして仁愛あることを汎く海外に表彰するは此時あり、一層此に注意すべ

明治二十七年　陸軍大臣伯爵　大山巖

◎第一軍司令官の檄

大山陸軍大臣が訓諭を發して、我が軍人の勇剛にして仁愛ならんことを厲告すること右の如し、今又た在韓の山縣軍司令官が檄文を發して、我が軍人の奮勵して榮死せんことを厲告するもの左の如し、前者は一半仁愛を主とし、後者は一半榮死を主とす、一は文職大臣の訓諭に出で、一は武職軍司令の檄文に發す、用意の相須て離るべからざる、周到緻密と謂ふべし

檄して名譽ある我が帝國軍隊の將校に告ぐ、東洋の平和一たび破れ、遂に亞細亞両帝國をして、兵馬の間に相見ゆるの己むを得ざるに至らしめしは、實に古今未曾有の事たり、我は師を出すに名あり、而して曲は彼に在りと雖も、

其衡を爭ひ雌雄を決するに及ひ、苟も我軍隊にして最初の目的を達せず、隨て全局勝を制する能はずんば、我日本帝國二千五百有餘年の名譽は、一朝にして地に墜ち、以て海外各國の笑ひを招くのみならず、永く不測の大難に陷るも亦未知るべからざるあり、國家士を養ふ正に今日の爲あり是れ固より將校諸君の熟知する所なりと雖ども、余は今新たに

天皇陛下の勅命を奉じ、軍司令官として來りて此地に臨みたるを以て、更に茲に一言せざるを得ず

嗚呼我が將校諸君は、忠肝義膽を有せり、此地に進軍してより以來、長きは數月、短きも數旬に亘る、氣候風土已に內地に同じからず、道途又嶮惡にして、宿舍は狹隘不潔、或は露營野處し、加之百般の需用は缺乏せり、然るに能く此等の艱苦を耐忍し、一號令の下に勇往直前し、以て敵國の首府を屠

ちん事を期するは、蓋し將校諸君の須臾も忘るゝ能はざる所なるべし、此れ我が士卒の忠肝義膽の熱血を灑ぎ、以て我が大日本帝國の威武を宇内に發揚するは、余が確信して疑はざる所なり

嗚呼我が軍隊は精銳剛毅なり、曩きに陸には成歡の捕虜占領あり、海には豐島の敵沈捕拿あり、初戰の勢ひ已に此の如し兆吉ありと謂ふべし、然りと雖ども是は初歩のみ、前途は尚は遼遠たり、敵地は廣漠なり、民人は衆多なり、今日以往我が軍隊の負擔する所、寔に重且大なりとす、此の際一二回の克捷を以て、直ちに敵軍を侮慢するの心を啓かしむ可からず、嗚呼將校諸君、仔其部下を戒飾し、宜しく益す奮勵し、進死を榮とし退生を辱とし、挽ます屈せず、電擊颯馳、一日も早く城下の盟を成し、速かに　宸襟を安んじ奉つるべ

き者也

終りに於て尚ほ一言す、我が敵とする所の者は獨り敵軍とす其他の人民に在ては、我が軍隊に妨害し、若しくは妨害を加へんとする者の外は、我れ敵視するの限りにあらず、軍人と雖も降る者は殺すべからず、然れども其詐術に惑る勿れ、且つ敵國は古より極めて殘忍の性を有せり、戰鬪に際し若し誤て其生擒に遇はゝ、必ず酷虐にして死に勝るの苦痛を受け、卒には野蠻慘毒の所爲を以て、其身命を戰賊せらるゝは必然なり、故に萬一如何なる非常の難戰に係るも、決して敵の生擒する所とならず、寧ろ潔よく一死を遂げ、以て日本男兒の氣象を示し、以て日本男兒の名譽を全うすべし、余不敏なりと雖ども、圖外の重任を承て、將に諸君と事に從はんとするの始めに當り、申告すること如此

明治二十七年九月　第一軍令官陸軍大將伯爵　山縣有朋

京城に於て

古語に曰く、勇將の下弱率なし、今軍司令官大將の此の厲告に遇ひ、孰れか勇奮爭死せざらん、乃ち知る彼の奉天府を屠り、北京城に過るの軍、必らず此の北征軍に在るを

◎榮死尉官田上覺君

田上覺君は岡山縣の人なり、今回の外征に方り歩兵第十一聯隊第二大隊第六中隊長として軍に從はる、時恰かも七月廿三日、京城大院君護衛の軍に加はり、韓兵を驅逐す、同月廿九日成歡の役亦た先登して功を奏す、此役第二大隊長橋本歩兵少佐傷くや、君直に代て大隊長の職を執り戰功あり、九月十五日平壤攻擊の際、君亦た第一第二兩大隊と俱に勇進し、大に敵軍を惱ましし銃丸に中りて死す、人と爲り剛毅嚴正特に戰

術に通ず、曩に命を奉じて征清の途に上らんとするに當り、合圍を諭して曰く「今回從軍の命を奉ず、本懷之に過ぎず、予素と生還を欲せず、汝若し戰死の報に接するあるも決して驚くべきにあらざるゝ勿論、他日一般軍隊の凱旋に際し、各戰功を立て生て歸らるゝに當り、我獨り戰歿してあらざるときは、或は憂色の外に發せずとも云ひ難きに似たれども、此時と雖も決して憂愁するを許さず、一子健吉今年八歳あり、其十三歳に及ぶまでは、勝下に於て教育するは可なるも、以後は青木氏に託して教育の監督を乞へ云々」君は既に此の如く戰死を期したり、又た其の家を辭するの朝、匆卒筆を取りて「かねてより君にさゝげし我身あり、今朝ならばれて死すべしと書き殘されたりとなん、嗚呼勇剛濕決なる快男兒哉

◎海戰大捷利

弔場陸戰の大捷利、並に北附隨の大小事局の、此の編を草するまでに獲たるものは、悉く載せて前に在り、亦た盡せりとす、今や帝國海軍大捷利の顚末を列記せん、帝國軍艦一たび動きて敵艦を豐島に擲沈し、再び動きて敵壘を威海衛に破壞し、爲めに敵國をして大いに畏縮せしめたるは、天下の普く知る所なり、其後敵艦は深く渤海灣內に匿れて出でず、勇剛なる帝國艦隊戰はんと欲して戰ふこと能はず、空しく日を消するもの殆んど四旬、而して九月十七日に至り黃海に於て海洋島附近に、突如として一大海戰は開かれたり

其の前日十五日は、我が陸軍平壤を攻擊する由兼て聞き居たることなれば、我が全艦隊の一は、平壤の敵兵敗れて若し海路より逃ぐるあらば、之れを擊ち殲すべしとて大同江の方に向へり、又た一は敵國より送兵の爲め軍艦隨送し來るものと

偵察艦を放ちて鴨綠江沖海洋島邊を巡航せしめしに、果して敵多の敵艦を見出し、海洋島附近に於て端おく開戰したりと云ふこと、是れ此の海戰の發端なり、而して我が海軍大捷利を獲るに至れるの顚末は、序次列記することゝの如し

其一　上海急電

十八日午前十時發上海より急電に「日清軍艦鴨綠江に開戰し清艦は四隻擊ち沈められたり」とありしなり、然れども是れ當時甚だ疑はしとしたるに、果して其の筋に於ては虛傳たりとせられたり

其二　我艦大に敵艦を破る

上海急電は不幸にも、一旦消滅させられたること右の如し、然れども事實は消滅せざるが故に、今果して此の快報に接するを獲たり

九月十九日午後八時二十分釜山發

我が艦去る十六日遼東近海海洋島附近に於て、敵艦十一隻に出會ひ、其三隻を擊沈め一隻を燒棄たりと、只今公報あり

遼東近海の海戰に於て我艦は無事なり

次に又た左の詳報に接す

全日午後九時二十分仁所發

全日午後十時五分仁所發

最上川丸の齎らせし報に、「去る十六日午後一時我艦は、海洋島の東北三十五マイルの所に於て、清國軍艦十二隻水雷六隻に出會ひ、彼より砲擊を始めしかは、我艦應戰し敵艦三隻を擊ち沈め、一隻を燒き沈めたり、我艦無事なり」とあり

此に於て我が海軍大提利は、最早確かなるに至れり、國内の外に在る帝國臣民は、孰れも皆な躍然として歡聲湧く許りな

りき、爾來又た續々接する所の諸報あり、一も載錄を畧せず

其三　海戰公報……(第一)

二十日午後七時發廣島よりの電報左の如し

昨十九日午後九時釜山發にて古川大佐より大本營へ左の電報あり

今日午後四時四十分仁川發鹽屋兵站監より、左の報受領す

十六日我艦隊九艘は、清國軍艦十一艘と、黃海の北邊海洋島附近に於て開戰し、我艦隊大提利を得、敵艦三艘を沈沒せしめ、一艘を燒く

又當領事館に着したる報左の通り

只今大同江より入港の最上川丸の齎らせる報告に據れは、去る十六日午後一時、我艦隊は海洋島の北東三十五マイルにて、清國艦隊十二艘水雷六隻に出會ひ、彼より擊ち出し、

我大勝利、敵艦三隻を撃沈め、一隻は自から燒きたり我艦無事

陸下の御稜威陸海に浴ねし萬々歳

其四　上海戰報

東京より廣島なる伊藤總理大臣の許へ達したる電報左の如し

十八日接到したる二回の電報に曰く

李鴻章は他人の位を降し、又詔勅は韓地の敗軍の爲め、李鴻章の位を降し、其紅毛章を褫奪したりと云ふ

十九日上海より達したる他の電報に曰く

去十七日黃海に於ける海軍の戰鬪に、清國は四艘を失ひ、水師提督丁汝昌戰死し、其他死傷算なし、清人の說に日本も亦三艦を失ひたりと

十九日上海より達せし電報に曰く

當地の新聞は號外を發して左の如く報ず

黃海に於て日清兩艦隊の間に海戰あり、清國艦隊は多數の清兵の上陸を掩護し、其功を奏したるも、其際の戰鬪に、二千三百噸の致遠號は撃沈められ、千三百五十噸の超勇及び揚威の二艦各淺瀨に乘上げ、他の一艦は沈沒し、日本の軍艦三艘も亦然りと云、水師提督丁汝昌及び漢納根其他外國人は此戰に戰死したりと云ふ

此の數報は、天津に於て清官の公言する所に基きたるものなれば、之れを獲たるの當時甚だ疑ひを懷きたり、果して日本軍艦沈沒などの事はあらず

其五　軍令部長の報告

十九日午後釜山發にて大本營に達する電報左の如し

十六日午後五時本艦隊第一遊撃軍、赤城、西京丸の十二隻は、海洋島を經て大孤山口沖に向ひ進航せしに、十七日午

前十一時四十五分敵の艦隊定遠、鎮遠、致遠、來遠、經遠、威遠、揚威、超勇、廣甲、廣丙、平遠と水雷艇六隻を發見せり、午後零時四十五分開戰激戰中、我軍艦西京丸數彈を受け、舵器を破損せられたるを以て、レリイピングテークルを用ひ、進退自由あらざる爲め、午後三時十五分敵艦隊及び水雷艇の中を乘拔ける際、彼より水雷二發を發射したれども其功を奏せざりき、吾軍艦は我根據地に進路を進め今日（十九日）午前一時四十五分歸着せり、本艦列外に出る時敵艦二隻廢艦とありしやに見受けたり、其後我艦隊は尙決戰をなしつゝあり、然るに今朝最上川丸は、大同江沖に於て松島に出會ひ、左の信號を持ち來れり

昨日開戰我勝利、本艦某處に往く

又昨日投錨地に到着したる第二遊撃軍及び八重山は、直ち

に應援の爲め戰地に發航せり、斯く艦隊の別れし原因は、陸軍兵護送と陸軍兵應援との二つにあり

比叡は戰鬪中火災の爲列外に出で、鎭火の後ち本隊の所在を失ひ、今朝歸着せり、同艦死亡廿人、負傷卅四人、本艦は負傷十二人、本艦に到りし彈丸數は、卅サンチ半四箇、其他二十一サンチ以下數箇あり

樺山軍令部長

其六　吉野艦の戰狀

十九日午後七時十六日發釜山よりせる電報あり、曰く

十七日午後七時十分、仁川領事館より發せし電報に「吉野パレットを擊たれたり、外一艦も擊れしも、共に無事電文單簡にして戰鬪如何を知るに由なけれど、吉野艦外一艦の苦戰粗ぼ察せられたり

北七　大勝利の確說

二十日午前八時四十五分渡又た釜山よりの電報あり、曰く

十六日の海戰に、清國軍艦は四隻擊ち沈められ、七隻自ら燒き、我艦は二隻損傷わるのみと云ふ、是れ確說なり

此の報に依れば、敵艦を失ふこと都合十一艘あれども、軍艦のみにあらずして、水雷艇を混じたる數なりとは、後ちにぞ知られける

其八　海戰續聞

二十一日午前八時三十二分發廣島よりの電報あり、曰く

今黃海々戰に就き稍や詳かなる報に接せり、左の如し

我艦は十二隻、敵の艦隊は十四隻、十七日午後零時四十五分より午後五時まで數回激戰、來遠、揚威、超勇の三艦と靖遠又は致遠の中一艘と、都合四艘破壞し、其他にも大破損を與へたり、定遠、經遠の如きも火災起りて困難せり、

日沒後は敵威海衛方向に逃る、我は敵を見失ひて引還し、翌朝尋ねたれども見當らず、我艦は一も沈沒せしものなし

我死傷士官下士卒百六十あり

之れを前數報と見るに、更に一層の明詳を致せり、敵艦定遠は我艦の兼てより目指す所、彼の威海衛を衝きたる時も、彼の姉妹艦卽ち定遠、鎭遠を擊破せんと欲したるにありき、左れば爰に定遠と相會して激戰を試み、遂に彼れ艦をして火災を生ぜしむるに至らしめしものと知られたり、我が軍艦の悅喜左こそと推量られぬ

其九　戰捷艦報

二十一日午前十時三十五分發釜山よりの電報あり、曰く

去る十六日の海戰は、我艦隊偵邏の爲め盛京省大孤山沖に到らんとして、午後一時頃端なく敵の艦隊に出會ひ先づ其

一隻を撃沈めたるに、敵は早くも隊伍を亂す、我が艦逐に敵の揚威、超勇、來遠、靖遠を撃沈、定遠、經遠、平遠の火藥庫を撃て燒き沈たり、敵の艦隊へ水雷艇とも二十隻、我艦十一隻就中赤城比叡、松島は幾許か損傷あり、戰死せる者將校十人、下士以下三十人、負傷百六十人、艦隊附屬の西京丸水雷をかけられ且つ砲撃せられれども無事なりき

之れを前報と見るるに、戰捷の模樣尙は一層明らかにせり、而して次掲の公報は此の海戰の本實、毫も戰況に修飾あき所のものなり

其十　海戰公報……（第二）

二十一日午前十一時四十分廣廣島よりの電報左の如し

只今左の電報を獲たり

海軍電報二十日午後二時三分仁川發、五時十分鎭山發、同二十分廣島着

十四日第二遊擊隊と八重山艦とを仁川に留め、其他の諸艦を率ゐて發し、十五日大同江に達し、第三遊擊隊と水雷艇磐城、天城を鐵島まで進て陸軍の應援を爲しめ、十六日本隊と第一遊擊隊及赤城、西京丸都合十二隻を率て大同江を發し、十七日朝海洋島を經て盛京省大孤山沖に到りしに、敵の艦隊十四隻と水雷艇六隻とに出會ひ、午後零時四十五分より午後五時すぎまで數回激戰をなし、遂に來遠、揚威超勇の三隻、靖遠又は致遠の中一隻、都合四隻を破壞沈沒せしめ、其他にも大損害を與へたるもの多し、現に定遠、經遠の如きも火災起り、頗る困難の狀あるを見たり、其中日沒に近づき、敵艦は威海衛の方向に向ひて逃走るの狀あ

りたるが故に、我艦隊も之を遮ぎる爲め、凡そ之と并行の航路を取りて進みしも、夜中敵の水雷艇に備ふる爲め、餘程の距離を隔てゝ進みしがゆゑ敵の所在を失へり、然れども翌朝天明に至れば必ず之を見出し得るあらんと、期して廟島の方向に進みしに、天明に至るも敵の一隻をも見出さず、故は敵は或は元の地に引還したるやも測られずと思考し、昨日の戰地に引還したるに、遙かに二三隻の烟を認めしも、何れにか逃れ去りて其所在を失へり、因て前日火災の爲め淺瀬に乘上げて見棄ありし揚威を破壞せ、一先當地に歸りたり

西京丸の軍令部長乘込み、屢々危險の地に陷りしも、幸に無事にて當地に歸りたり

此役我艦隊には沈沒せしものなし、但し多少の損害を受け

たるは勿論もり、其中松島最も甚だしきも、職務には少し も故障なし、而して我艦隊の死傷は左の如し

戰死者　將校十人、下士卒六十九人、負傷者は艦隊を通じ、將校下士卒通じて凡そ百六十八、內松島、赤城、比叡最も多し

此役比叡、赤城最も苦戰す、比叡は本隊と分離し、苦戰の末一先當地に歸り、負傷者を運送船に託し、更に海門と共に本官を索むる爲め出發せりと云ふ

九月十九日朝鮮に於て　伊東聯合艦隊司令長官

今聯合艦隊司令長官の報告を獲て、戰鬪の狀況を詳らかにす、

是に由て觀るときは、今回の海戰たる、敵は殆んど其の全精銳を擧げて我に當れり、敵は豐島の一敗に懲り、威海衛の再襲に怖れ、敢て進擊我に當るの勇決なきに似たりさと雖も、彼我國宣戰を公布して戰はざるに歇ひべきにあらず、

左れば時機到らば彼れも出で、戰はんと思へりき、此の役我が艦は一決戰を求めんと、敵艦の所在を偵邏したるに相逢ふしと雖も、敵も亦た艦雷相共に二十隻を率ゐて來る、其の意一決戰を爲さんと覺悟し來るに相逢なし、而して開戰半日激戰數回、遂に其數隻を失ふと數隻を損ずるに至り、今や力支ふ能はずとして餘艦皆な敗走す、乃ち我が海軍大勝利を獲たる所なり、想ふに敵國擁有する所の軍艦中、其の用に堪ふるものは凡十六隻、前後二回我との交戰に其の半數を失ふに至れり、剩す所尙は半數はありと雖も、彼は今回の戰を以て、始めて我が海軍の技倆を知りしならん、我が海軍は亦た未だ全く敵の姉妹艦を破らずと雖も、敵艦の戰鬪力も大抵察知するに足り、今後海陸相應じて進擊するに際し、益し重荷の半を減じたるの思ひあらなんかし

其十一　海軍省揭示戰報

二十一日海軍省にては左の電報を揭示せらる

二十日午後八時京城大島公使發

島村海軍大尉の報告に據れば、本月十七日午後一時より五時まで、盛京省大孤山沖に於て、我軍艦十一隻は清國軍艦十四隻水雷六隻との間に於て激烈なる海戰あり、清艦揚威、超勇、來遠、靖遠は擊沈められ、定遠、經遠、平遠、致遠は燒かれ殘餘の清艦は悉く大破損を受け、西の方に向ひて逃去りたり

我方にては松島、比叡、赤城多少の損害を受けたり、將校以下死傷あり

我が海軍大捷利の諸報こゝに竭く、是より他を揭げん

◎勅語……（我海軍大勝得嘉納の）

海戰大捷の吉報大本營に達するや、恐おくも　大元帥陛下

御満足に思食させられ、二十日大本營に於て御前會議を開かせられし砌り、左の勅語を賜へりと然ふ

朕我が聯合艦隊の黄海に奮戰し、大捷を獲たるを聞き、其の威力已に敵海を制壓するを覺ゆ、深く將校下士卒の勤勞を察し、茲に特殊の勳功を奏するを嘉す

此に於て有栖川參謀總長の宮は、直ちに電信を以て之れを在韓聯合艦隊司令長官に傳宣せられたり

◎令旨……(仝前)

二十一日午前十時十分東京發にて、香川皇后宮太夫より大本營へ左の電報を送らる

今般我海軍黄海に於て大捷を獲たる趣、皇后陛下聞食され、將校以下奮戰能く功を奏したるを、深く御感賞あらせられたり

參謀總長の宮例の如く之を艦隊司令官に傳達せらる

◎御辭……(仝前)

二十二日午後四時東京發にて、伊藤海軍次官より大本營海軍參謀官宛の電報左の通り

海軍勝利に就き皇太子殿下より御使を下されたるも、本日御禮として參殿せしに拜謁仰付けられ、海軍大勝利を聞き滿足に思ふとの御辭あり、且西京丸の狀況より樺山軍令部長の健康に關して、御懇篤なる御意あり、同部長及び艦隊司令長官へ御通知ありたし

此に於て仝參謀官は、直ちに此の趣を在韓両官へ通知せらる

◎伊東聯合艦隊司令長官の奉答

二十四日午前十時三分仁川發にて、伊東長官より電報を以て大元帥陛下へ左の奉答をまゐらせらる

聯合艦隊の黄海に於ける戰捷を聞食され、特に優渥なる勅語を賜ふ、臣祐亨恐懼に堪へず、茲に謹しく陛下の萬歳を祝し奉る、謹んで奉答す

聯合艦隊司令長官　伊東祐亨

九月二十三日

前同斷　皇后陛下へ左の奉答をまいらせらる

聯合艦隊の黄海に於ける戰捷を聞食され、優渥なる御辭を賜ふ、臣祐亨恐懼に堪へず、茲に陛下の萬歳を祝し奉る

◎艦士の潔決

今回の海軍激戰は近世無比、歐州と雖も艦製一新してより以來、未だ此瞠目駭心の事あらず、而して我の大捷に歸す、實に日本無上の光榮、以て帝國の國光を全世界に發輝するに足る、抑も此の無上光榮なる大捷を獲たるは、將士卒の伎倆彼

れに勝れたるの致す所あるは論なけれども、實は艦士の潔決ある覺悟が致したる所なり、凡そ外國の戰爭に於ては、軍艦戰鬪力を失へば、直ちに白旗を檣頭に樹て、降意を表す、然れども我武士道は外人の精神とは其選を異にするものあり、苟くも敵陣に赴きては、再び生を全うして醜を遺すが如きことは、武門の大恥辱なりとし、健鬪苦戰刀折れ矢尽き、斃れて後ち休むを以て榮譽と爲す、今回我が征清艦隊の日本海を辟するや、全員誓ふて生還を期せず、何れの艦中にも一の白旗を準備せず、白布の類は見るも汚らはしとて、彼の手拭の如きも決して白地を携帶せず、戰ひ利あらざれば艦隊と共に碎くるのみ、其の他おしとの潔決ある覺悟にて出航したりと云ふ、此の如きの海軍士人、世界何れの國にかある、只獨り我が帝國海軍士人あるのみ

◎黃海戰死將校

此の役我が赤城艦長海軍少佐坂元八郎太君始め、左の將校いづれも名譽なる戰死を遂げられたり

赤城艦長海軍少佐從六位勳四等　鹿兒島縣士族　阪元八郎太　安政六年正月元日生

橋立分隊長海軍大尉正七位勳六等　富山縣士族　高橋義篤　安政五年五月廿五日生

松島分隊長海軍大尉正七位　宮崎縣士族　志摩清直　安政五年五月廿七日生

橋立砲術長海軍大尉正七位　鹿兒島縣士族　瀨之口寬四郎　元治元年十一月廿五日生

秋津洲分隊長海軍大尉從七位　滋賀縣士族　永田廉平　慶應二年六月廿五日生

比叡軍醫長海軍大軍醫正七位勳六等　愛媛縣平民　三宅貞造　安政元年十月廿三日生

比叡主計長海軍大主計從七位　靜岡縣士族　石塚鑄太　明治元年三月十八日生

松島分隊士海軍少尉正八位　宮崎縣士族　伊東滿嘉記　慶應三年一月九日生

吉野分隊士海軍少尉正八位　富山縣士族　淺尾重行　慶應三年八月十一日生

比叡乘組海軍少軍醫正八位　和歌山縣士族　村越千代吉　元治元年一月三日生

今因に赤城艦長其他四五の獲たる略歷を左に掲記す

其一　坂元少佐

赤城艦長海軍少佐鹿兒島縣士族坂元八郎太君は、幼より頴悟讀

藩に耽ける、明治四年三月藩兵として上京、七月海軍兵學校に入學し、孜々勉學する所あり、十年二月卒業海軍少尉補に任ず、時に偶ま西南の亂あり、君乃ち某艦乘組を命せられ、直ちに航行繼で河村參軍に從ひ轉戰す、凱旋後勳六等に叙し少尉に任じ、遂に亦た大尉に進む、君頗る航海術に長じ、又歐洲留學の宿志あり、廿二年三月露國公使館附を命せられ、聖得堡に在りて海軍の事を研究する殆んど五年、昨年に至り公使館附を免せられ、英國にて製造の吉野艦回航委員に轉じ、直ちに同國に赴き、河原大佐等と同乘して歸朝し、同艦副長に補せらる、今回征清の事起るや拔ぜられて赤城艦長に進み少佐に昇任したりしあり、怎くて直ちに韓海に向ひ進發し、黃海の海戰に偉大の功を奏し、遂に敵丸に破られて死す、享年四十一、君の母堂は年六十餘、現に東京西久保の邸に在り

海軍省より凶報を傳ふるや、從容として毫も愁傷の色を見さず、國家の爲め身命を擲つは軍人の本分にして、出發の際既に再會を期せざりきと云へりとかや、其の素質ある以て知るべし

其二　村越少軍醫

比叡艦乘組少軍醫和歌山縣士族村越千代吉君は、和歌山島崎町一番地に住する村越瓦應氏の實弟なり、明治十三年海軍々醫學校の醫學生となり、爾來孜々勉學の功を積、十八年業を卒直ちに少軍醫に任じ、同艦乘組員となり、常に勉勵の聞ありしが、今回遂に職務に殉れたり、享年三十二とぞ聞ねし

其三　高橋大尉

橋立分隊長海軍大尉富山縣士族高橋義篤君は、幼時好んで武事を談じ、快言壯語時に老成人を驚かし、夙に頭角を藩中に顯す

年十四藩主前田氏の選拔する所となり、箕作氏の門に遊び、又村上氏の門に入る、時に藩々費勵學生を廢止するを以て、故郷に歸るとは雖も其志益す堅く、暫て海軍に從事せんことを期し、單身再び上京す、當時君が家極めて貧困、學資を辨ずる能はず、遂に某の學僕となり、苦學多年業大に進む、明治七年海軍兵學察に入り、十三年海軍少尉補に任せらる、爾來谷艦に轉乘し、廿七年六月橋立艦分隊長に補し、黃海の激戰に名譽ある戰死を遂げぬ、君常に其妻に誡めて曰く、軍人の本分は國難に殉するに在り、予幸に戰死せば又以て瞑するに足る、汝徒らに悲哀に沈みて家聲を辱むる勿れと、而して其家を齊ふるや勉儉自ら力め、質素を以て家風と爲す、然れども其母を奉するや輕煖紀甘、力を盡して尙は足らざるを恐る、今回日清の交涉起るや君橫須賀豫備艦副官たりしが、同僚前後命を率ゐて出艦するを聞き、宿望禁

し難く扼腕して命の下る遲きを慨せり、既にして軍艦橋立分隊長に補せらるゝや、喜色面に溢れて曰く、報國の秋至れりと、躍然起て命を拜す、發するに臨み其妻を呼び、遺書を函中に封入し謂て曰く、今回の任命其責め最も重し、予が戰死の報至らば始めて之を開くべし、但し老母をして知らしむべからずと、斷然として家を辭す、時に明治廿七年七月八日なり、越ゑて九月十七日訃音至る、夫人乃ち函を開きて遺書を見るに、書中の事只遺女の教訓あるのみとぞ

其四　瀨之口大尉

橋立砲術長海軍大尉鹿兒島士族瀨之口寬四郎君は、大隅國始良郡蒲生村の人、天資英敏氣力人に勝る、十九歲東都に上り、芝攻玉社に入て海軍の學科を豫修すること二年餘、後ち海軍兵學校に入り、三年の科程を卒へ、後二年間巡航艦に乘組み、水

雷及び砲術の練習を爲し、廿五歳にして海軍少尉に任せらる、明治廿四年四月嚴島艦回航委員として佛國に赴き、同廿五年四月歸朝し、直に海軍大尉に昇進す、爾來同艦に乘組むこと二年、昨廿六年一月以來龍驤艦に移りしが、同年秋八月選拔せられて海軍大學校に入り、修學中本年六月山城丸に乘組み、戰地に向て出發し、後又橋立艦に移られ、遂に榮死を爲す、享年三十一、妻子なく只一弟あるのみ、兄瀨之口某氏は炭礦會社の瞻振丸副船長を勤め居れりと云ふ

其五　三宅大軍醫

北叡軍醫長海軍大軍醫愛姫縣平民三宅貞造君は、幼名を應次郎と稱す、明治七年九月海軍々醫寮の外來生徒となり、翌年四月生科生徒申付けられ、爾來七年英人アンデルソン氏に從ひ醫術を學ぶ同年二月海軍々醫副に任せられて以來、多くは軍艦に乘組み、醫務を勉勵す、稟質温順にして病者に接する懇切叮嚀あり君又耐忍の特性あり難事に逢ふて屈せず、遠洋航海中に在りて尙且つ醫事に關する調査を爲し、頗ふる精密の譽ありしが、黃海の激戰に榮死を遂げられたり

◎清帝の赫怒

强は勝ち弱は敗く固より然り、然るに清帝は李鴻章の上申に對して黃海の敗衂を赫怒し、恭親王に命じて大孤山沖より歸りたる軍艦を親しく檢閲せしめん事とし、親王は已に出發せりと廿一日發上海來電に見ゆ、清帝何を苦みてか怒る、優勝劣敗の理を知らずや

◎西京丸の至險話

黃海の激戰電知に止まりて未だ其詳報に接せざれば、當時の戰狀を明らかにする能はざれど、或る確信に據れば、彼の時我が艦

隊は、敵艦六隻を轟沈若くは焚燒したる外、水雷艇三隻をも撃沈めたり、此役敵艦に目指されたるは西京丸にて、敵の諸艦力を合せて砲撃したれど、此船は人の已知する如く素と郵船として遣りたるを、俄に砲を架して軍用に供せしなれば、戰鬪兎角意の如くあらず、既にして數彈を受け能さへ損傷しければ、戰列を離れんとする際敵艦より船体目懸けて顧りに水雷を放ちたり、第一の水雷は船首を掠めて去しも、第二は過たず船腹を距る七八間の處まで進み來りしかば、樺山中將始め乘組一同我が事了るぞ思ひしに、幸なるかな水雷は二三間許りの所にて、如何にかしけん海底深く沈みて船底を潛り拔け、遙か彼方に浮上れりと云ふ、此の如きは稀有の話にして所謂る神助とや申すべき

◎海戰の奏上

松村海軍少尉、伊東聯合艦隊司令長官の使として廿三日廣島に

赴き　大元帥陛下に謁見して戰況を奏上したりと云ふ、今其要略を開くに即ち左の如し

初め清艦十四隻は水雷艇六隻と共に、太孤山口に繫泊し居たるを我軍艦偵察中に發見したり、清艦は直ちに列を正して進み來り、我艦と四千メートルの距離に於て發砲したり

我艦は遠距離にて命中を誤らんとを危み、三千メートルの距離まで進み始めて應戰せり、交戰四五時我艦は終始隊形を變せず、清艦は遂に崩れ立ち、來遠先づ沈沒して後部より水に入り、前部は屹立して半空に向へり、致遠超勇緯で沈沒し、士卒多く帆綱に縋り號泣活を求む、其狀悲慘を極めたり

我艦の敵艦を撃沈する皆な砲彈を用ひ、水雷に依らざるも偖く二重底の來遠を撃沈したり、是れチルソン以來稀有の奇功あるべし、比叡速力少しく遺憾を免かれず、且つ列の最

後に在りしを以て多く敵彈を受け、遂に火災の爲めに列外に出でたり

西京は舵機を壞られ、列外に出でんとして猛然鎭遠定遠の間を突過す、其距離僅に七八十メートル、而して清艦は之を以て衝突を求むるものと誤認したるや、意外にも開展して之を避け、西京の爲めに路を啓きたり、同時に清艦は魚形水雷二箇を放ちたるも、距離近きに過ぎて西京の艦底深く水中を透拔け、西京は爲めに事あきを得たり

列外に出でたる比叡は一旦根據地に來り、負傷者を運送船に移し醫官をも載せず、直ちに引返して戰鬪地に向ひたるも、最早間に合はざりしは乘組の士卒が無限の遺憾とする所あり

松島は旗艦として船頭に立ちたるを以て、砲彈を受る最も多く、爲めに損傷を生じ列外に出でざるべからざるに及び、伊東司令長官聯合艦隊幕僚は橋立に轉乘し、之を旗艦として我艦隊は浮足立ちたる清艦と併行に進行して之を尾擊したるも日沒し月黑く水雷に備ふるため注意して距離を保ちたるより、敵艦の所在を見失ひ、天明廟島に達し頻りに鉦索を盡したるも見當らず、乃ち前日の戰鬪地に歸り、揚威の委棄せられて既に人あきを視、魚形水雷を以て之を擊沈したり

清艦定遠、經遠、平遠は火災に罹りて狼狽を極め、戰鬪線內にある間は孰れも鎭火せざりき

米國軍艦一隻は、此海戰を目擊し居たりと思はれぬ

◎明石號の海戰報告

大同江より仁川に廻航したる明石號が、黃海の戰況を齎らせしと云ふへ、別に見る所あり、卽ち在の如し

戰場は海洋島附近にして、戰爭は午後零時頃より始りたり

戰場は鴨綠江口より九十六哩、旅順口を七十哩の所にあり

戰爭は日沒まで七時間の長きに亘り、雙方とも能く戰ひ、非常に激烈を極めたり、斯く長時間戰ひ斯く激烈なる戰をなしたるは、近古無比なるべしと云ふ

敵艦の總數水雷艇と共に二十一隻なり

戰爭中來遠號先づ降參旗を揭げたるも、其時は我艦より打出せる水雷、已に來遠號に向ひて走りし時なれば、來遠は白旗を揭げたるまゝ、敢へなく沈沒せり、同時に靖遠平遠の二艦も沈沒したり

致遠號は我艦より發したる彈丸、其火藥庫上に破裂したるため、全艦火となりて燒けたるは壯觀なりき

其他二隻の軍艦半ば水中に沒したるまゝ、引れて逃げ行く

を見たり

敵の發する彈丸は常に上を越し、水雷は常ゑ下に行き過ぎて其効用をあさず、西京丸の如き幾回も水雷を受けたれど皆な害を免かれたり

赤城艦は前檣を折られ、松島西京丸へ大傷を受け、比叡艦は後方より大砲を打ち込みし彈丸軍醫室を貫き、檣に當りて破裂し、爲めに軍醫、主計長、及び水兵七名死せり

西京丸は海軍々令部乘組居り、進退運動宜きを得たり其のショベキ崎に引揚げたる後、軍令部長は船長以下船員一同を甲板に集めて「卿等は軍人軍屬に非ずして、能く軍人軍屬の働き以上の働をなしたり、卿等の功は此海戰史に特書さるべし」との賞辭を與へたり

第二第三の艦隊は、十七日午後戰報を聞いて皆な戰地に向

へり

其他海洋島の海戰形況に付ては聞く所多ければ、世間の風說遽かに信じ難し

別報一

前報の外海洋島海戰詳報を聞けるも大同小異なり、只其異ある点のみ報ずべし

支那水雷艇指揮艦一隻は、戰爭中降旗を掲げつゝ沈沒したり

靖遠、平遠、及び水雷艇一隻都合三隻沈沒したり

來遠は大傷を負ひ、降旗を掲げながら乘組員を他艦に轉じつゝある所を、我千代田艦より水雷を放ちて打沈めたり

他の一艘(名不明)は島嶼へ乘り上げたり

致遠は我艦より放ちたる破裂彈にて、火を失し燒くこと二時間半に及べり

尙は他の二艘も引れ行くを見たるも、日既に暮れ其の儘にしたり

別報二

今更に左の確報を得たり

敵艦揚威、超勇、靖遠、來遠の四艦を打沈め、定遠、經遠平遠の三隻は火を發し大混雜、其他諸艦はすべて大破損我艦は進退の自由を失ひしもの一もなし、但し少しの損傷あり戰鬪夜に入り敵艦の所在を失ひしに終る、翌朝更に敵艦を索ひるも、何れにか逃げ去りて行方を知らず

海戰の大体、以上記列せる所を以て盡きたりと爲す、只其の發報を異にするに由り、從ふて其の記事を異にするものは尙は之ありと雖も、今省略して之を掲せず、又た本篇の主とする所は、事實を修飾せざるに在るを以て專ばら諸電を蒐集た

たり、是れ他日一部の戰史を編纂する參考の材料たりとす
爰に戰記を終るに當りて、更に特筆すべきものあり、蓋し是
れ帝國臣民の大に注目すべきものとす、何ぞや

◎臨時議會召集

即ち是なり、二十二日夜官報號外を以て左の詔勅を公けにせられたるあり

朕惟ふに國家今日の急は軍旅に在り、既に大統を進め親しく其事を視る、他時立法の要務早きを追ひ、議會の協贊を望むものあり、乃ち期に先ち帝國議會を召集するの必要を認め、茲に來る十月十五日を以て臨時議會を廣嶋に召集し、七日を以て會期となすべきことを命ず、百僚臣庶其れ朕が意を體せよ

御名御璽

明治廿七年九月廿二日

廣島大本營に於て

各大臣副署

平壤黃海

日清海陸激戰記 終

明治廿七年十月一日印刷
明治廿七年十月五日發行

定價八錢

版權所有

編輯兼發行者　大坂市東區安土町四丁目三十八番邸　鈴木常松

印刷者　大坂市西區阿波堀通二丁目六番邸　山口恒七

專賣所　大坂市東區安土町四丁目三十八番邸　積善館

仝　福岡縣博多中島町　積善館支店

仝　廣島市鹽屋町　積善館支店

最新實測

支那全國新地圖

石版印刷鮮明附

日清韓三國總覽地圖

紙面（竪壹尺八寸巾貳尺六寸）

定價郵税共金貳拾錢

今ヤ日清ノ和親破レテ海陸ノ戰已ニ一再ヒ水而泡渦將一障ノ風ニ逢ントス電光電音蹤然トシテ復タ耳ナ擊ツ蓋シ遠キニアラサルヘシ此時ニ方リ最モ必要ナルモノハ歐國ノ地圖ニ若クモノナシ故ヲ以テ坊間其地圖出版ノ許多ナル未タ曾テ見サル所ナリ然ルニ正確ナルモノニ至テハ寥々乎トシテ晨星モ啻ナラズ獨リ本圖ハ如カラス數年間清國ニ在リテ十九省ヲ滿遊シ地理ニ精通ナル吉村達二君ノ原圖ニ依リ其他歐米刊行ノ地圖ヲ纂譯シ以テ之レヲ補フ且ツ有名ナル製圖技士宗氏ノ手ニ成リ專ラ日清韓三國ノ海圖ヲ明瞭ニシ船海家ハ勿論苟クモ日本臣民タル者三國ノ地形海路ヲ知リ進テ支那内地ノ要所ヲ知悉スルニアリ故ニ今回舞館ニ於テ正確緻密ナル地圖ヲ發行スル所以ナリ大方諸彦幸ニ購求ノ榮ヲ垂レ他ノ製圖ト霄壤ノ懸隔アルヲ知リタマヘ

最新實測

朝鮮國明細新圖

石版印刷鮮明附

日清韓海陸里程表各要所港灣圖

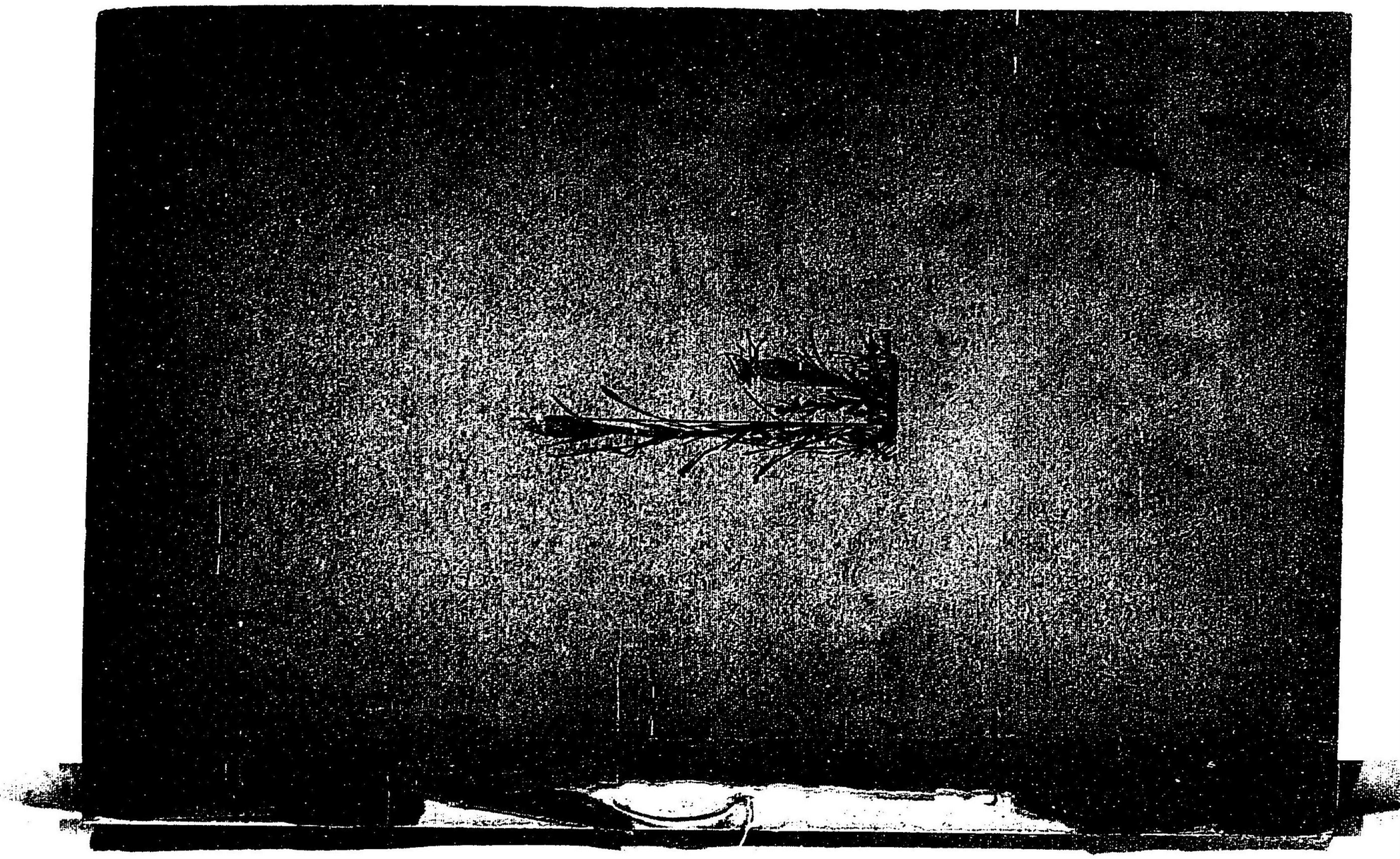
紙面（竪壹尺八寸巾貳尺六寸）

定價郵税共金貳拾錢

韓山ノ妖雲簇々トシテ東洋ノ青天ヲ暗澹タラシメ延テ日清ノ關係トナリ又韓兵暴舉トナリ東方一隅ノ問題ハ進テ世界ノ大問題トナレリ此時ニ方リテ尤モ必要缺ク可ラサルモノハ該地圖ニ若クモノナカルヘシ因テ這回詳良ノ地圖ヲ發刊ス乞フ大方ノ諸彦購閲アランヲヲ

支那地理全

附支那全圖及人情風俗畫幷ニ諸港圖挿入

定價郵税共金拾五錢

交戰國卽チ支那ハ地誌ノ今日ニ必要ナルハ吾人ノ認ムル所ナリ然ルニ支那ハ從來守舊國ニシテ内地百般ノ調査未タ整頓セサルモノ尠ナカラス故ニ地誌ノ如キハ尤モ筆ヲ下スニ困難ヲ感スルハ世人ノ認知スル所ナリ因テ本書ハ此困難ニ耐ヘ正確周密ニ調査ヲ遂ケテ編纂シタルモノナレハ尋常ノ地誌ト比スヘキモノニアラス就中交戰上最モ必要ナル各地ノ方位里程ヲ十九省毎ニ詳記シ併セテ李鴻章ガ朝鮮ニ送リシ外交策ノ一文ヲ卷末ニ附シ讀者ノ參考ニ供スル等ノ如キハ本書獨得ノ点ナリトス乞フ大方ノ諸彦一本ヲ購讀シテ以テ其有用ノ書ナルヲヲ知リタマヘ